

## 水稻病害

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
いもち病 (穂いもち)	やや早	やや多 (県北・県中 :並)	(1) 県全体の出穂期は、平年より4日程度早まる見込み（令和3年度農作物技術情報 第5号 水稻より）。 (2) 7月下旬の葉いもちの発生圃場率は、県南・沿岸部で平年より高かった。(+) (3) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
紋枯病	—	やや多	(1) 7月下旬の紋枯病の発生圃場率は、平年並であった。(±) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生に好適な条件である。(+)

記号の説明 (++) : 重要な多発要因、(+) : 多発要因、(±) : 並発要因、(-) : 少発要因、(- -) : 重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【いもち病（穂いもち）】

○水稻の出穂期が平年よりやや早くなっているため、防除時期を逸しないように注意する。

○穂いもちの伝染源となる上位葉での葉いもち発生が見られた場合は、茎葉散布を実施する（7月16日発表病害虫発生予察情報 注意報第4号（イネいもち病（穂いもち））を参照すること）。

(1) 穂いもち防除は、出穂前の予防剤の施用、または出穂直前と穂揃期の2回の茎葉散布を基本とする。

(2) 穂いもちの多発生が予想される場合は、以下の防除を行う。

ア 出穂後に降雨が続いたり、低温等で出穂期間が長引く場合は、出穂直前から、穂揃期1週間後まで、7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施する。

イ 上位葉での葉いもち多発時には、確認時から防除開始とし、穂揃期1週間後まで、7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施する。

ウ 薬剤は、以下の剤を中心に選択する。

フジワン剤、ブラシン剤、ノンプラス剤、ダブルカット剤、トライフロアブル

注) ダブルカット剤は穂揃期までの使用

#### 【紋枯病】

○紋枯病は圃場を良く観察し、要防除水準に達している場合は、防除を実施する。

(1) 要防除水準は、穂ばらみ末期に畦畔際の株を調査し、発病株率が早生～中生種で15%、晩生種で20%以上の場合である。

(2) 要防除水準に達している場合は、出穂7日前～出穂直前に茎葉散布を実施する。その際、薬剤は株元に十分散布する。

#### 【ごま葉枯病（穂枯れ）】

(1) 葉での発生が多い圃場では、出穂直前および穂揃期の茎葉散布で穂いもちとの同時防除を行う。

## 水稻虫害

### 1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点米 カメムシ類 (カスミカメムシ類)	加害時期 やや早	多	(1) 県全体の出穂期は、平年より4日程度早まる見込み（令和3年度 農作物技術情報 第5号 水稻より）。 (2) 7月下旬の畦畔におけるすくい取り調査では、発生圃場率は平年より高かった（+） (3) 8月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。（+）
フタオビコヤガ (イネアオムシ)	—	並	(1) 7月下旬の本田におけるすくい取り調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。（-） (2) 8月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。（+）
ウンカ類	—	並 (平年少発生)	(1) 7月下旬の本田におけるすくい取り調査では、発生圃場率は平年並に低かった。（±） (2) 8月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。（+）
ツマグロ ヨコバイ	—	並 (平年少発生)	(1) 7月下旬の本田におけるすくい取り調査では、発生は確認されていない。（-） (2) 8月の気温は平年並か高い予報であり、発生に好適な条件。（+）

記号の説明（++）：重要な多発要因、（+）：多発要因、（±）：並発要因、（-）：少発要因、（--）：重要な少発要因

### 2 防除のポイント

#### 【斑点米カメムシ類】

7月27日発表 病害虫発生予察情報 注意報第5号（斑点米カメムシ類）を参照し、水稻の穂揃期1週間後の基本防除を徹底する。

- (1) 薬剤による防除は、転作牧草地や雑草地に隣接したところを中心に行い、斑点米カメムシ類の生息する畦畔にも散布する。
- (2) 茎葉散布による防除適期は、水稻の穂揃期1週間後である。ただし、以下のような場合は、斑点米カメムシ類の発生が多くなるので、穂揃期1週間後および穂揃期2週間後の2回防除を実施する。なお、穂揃期1週間後にジノテフラン剤（アルバリン、スタークル剤）を使用した場合、2回目の防除は穂揃期3週間後に実施する。
  - ア 水田付近に出穂・開花中のイネ科植物（特にイタリアンライグラス）を含んだ牧草地等がある場合。
  - イ 本田内にノビエ、イヌホタルイ、シズイ等が多発している場合。
  - ウ 割れ籾が多い品種（あきたこまち等）。
- (3) 地域一斉に防除すると効果が高い。地域の穂揃期の幅が7日以内の場合、半数の圃場が穂揃期に達した時期の約7日後に一斉防除を実施する。
- (4) 地域内で出穂の早い品種がある場合は、その圃場に被害が集中することがあるので注意する。
- (5) 水稻出穂間際の草刈りは、アカスジカスミカメを水田に追い込むこととなるので、水稻出穂15～10日前までの草刈りが実施できなかった場合は、本田の薬剤散布（穂揃期1週間）後7日以内に実施する。

#### 【フタオビコヤガ（イネアオムシ）】

- (1) 一般には防除は不要であるが、おおよその防除の目安は、被害葉率50%程度である。

### **【ウンカ類、ツマグロヨコバイ】**

(1) 一般には防除は不要である。

### **3 防除上の留意事項**

(1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家等への防除計画の事前周知に努めるなどミツバチへの危害防止対策を徹底する。

(2) 薬剤散布の際は、農薬使用基準を遵守し、周辺作物等への飛散防止に努める。